

A.E. マクグラス著・稲垣久和・倉沢正則・小林高德 訳

『科学と宗教』（教文館 2009 年 4 月）書評

沼田 和也

人文科学の諸分野と自然科学のそれとのあいだには、様々な学際的交流もあるだろう。しかし筆者の日常レベルの感覚では、両者のあいだには埋めがたい溝があるように思われる。「文系」に属する筆者にとっては、高校生レベルの理科や数学でさえ、もはや遠い世界である。飛躍かもしれないが、それは筆者ひとりに限らず、神学を学ぶ人や牧師、あるいは神学を研究する人など、多くの「文系」の人が味わう感覚ではないだろうか。

当たり前だが、一つの学問分野には限らない研究の深みがある。それを承知の上で自分の専門外の分野について言及するとなれば、その分野への相当な理解が必要である⁽¹⁾。しかし一方で「恥をかくのは嫌だから自分の専門外への発言は控えよう」とは言っていられない状況が、文系であろうが理系であろうがキリスト者にもあるだろう。他の宗教を信じる人々や無宗教の人々と同様に、キリスト者もまたこの世界に生きている以上、キリスト教の用語や世界観のみに閉じこもってははいられない。まして、わたしたちの世界観を左右するような自然科学的諸研究が、神の存在云々といった議論など吹き飛ばしてしまうほどの成果を挙げる今日である。キリスト教が自然科学に対して、あるいは自然科学的世界観をもとに神を否定する人々に対して、対話的応答をなすことはいかにして可能なのだろうか⁽²⁾。今回取り上げる A.E. マクグラス著、稲垣久和・倉沢正則・小林高德訳、『科学と宗教』、教文館、2009。は、こうした問題に対する入門的図書である。

『科学と宗教』の全体は、まさにマクグラス自身が「入門書」（11 頁）と呼ぶとおりの特色を持っている。本書においてマクグラスは神学や科学のある一点、一思想に

(1) かつてアラン・ソーカルなる物理学者が、ポスト・モダン思想を装った擬似論文（実はまったく無意味で出鱈目な論文）を発表し、それが擬似論文であるにも関わらず人文科学系の人々から高く評価されるという事件が起こった（1994 年、ソーカル事件）。事の是非はともかく、人文科学系の研究者が自然科学的諸概念を正しく知り、用いることの困難を示した一例とはいえる。A. ソーカル・J. ブリクモン著、田崎晴明ほか訳、『「知」の欺瞞 ポストモダン思想における科学の濫用』、岩波書店、2000、246-247 頁。の「1 自分が何をいっているかわかっているのはいいことだ。」参照。

(2) 筆者がそもそもマクグラスに興味を抱いたのもこの点からであった。A.E. マクグラスと森本あんりによる対談「無神論の黄昏」、『季刊 Ministry 創刊号』、キリスト新聞社、2009、56-62 頁を参照。

専門的に焦点を絞るのではなく、可能な限り総合的に、幅広く科学と宗教との接点を論じようとする。そもそも自然科学はなぜキリスト教世界において生じたのか。また自然科学の影響下、神や宗教についてどんな議論が行われてきたのか。こうした消息について、本書を用いて総合的に学ぶことが可能である。しかも本書冒頭の「序」および「本書の使い方」の二つの章において、本書の意図や読み進め方について、著者自身による丁寧な解説がなされている。そのため読者は自然科学についての専門的な知識がなくても、本書を用いて、科学と宗教との境界において思索することができるのである。各章の終わりには参考文献の指示も豊富になされており、読者は本書からさらに専門的に学びを広げてゆくこともできる。また本書においては通時的に科学・神学の歴史を追うと同時に、共時的に機械的宇宙観／理神論／無神論の問題および進化論の問題を柱とし、随時これらの問題に立ち返りつつ神学の側から応答している。これらの問題は終盤の第八章「科学と宗教の諸問題」において一まとまりのテーマとして再び提起される。そして最終章である第九章「科学と宗教の事例研究」において、これらの問題に対する神学の側からの応答が、七人の思想を概観することによってなされている。このような本書の構成によって読者はジョン・ポーキングホーンやトマス・F・トーランスなど、自然科学と宗教（ことにキリスト教神学）との境界において研究する科学者・神学者について、入門的に学ぶことができる。彼らはもともと科学者であったり神学者であったりと出自は様々であるが、科学、宗教（キリスト教）それぞれに対する深い学びを重ね、その境界線ことに自然神学の可能性について有効な発言をしている。読者は『科学と宗教』を出発点として、必要に応じてこれらの科学者・神学者の諸著作へと発展的に学ぶことができるようになっているのである⁽³⁾。

本書におけるこのような科学と神学との接点は、第七章において頂点に達していると考えられる。筆者の印象では、この章こそ科学と宗教との論理的共通性を、最も明快に語っているように思われるのである。というのも第七章では、自然科学の諸分野および神学がそもそもどのような認識論に立って研究しているのかという議論を扱っているからである。科学と宗教におけるこの根源的な認識論的問題について、本書は素朴な実在論に立つのでもなく、安易な実在の否定に至るのでもない。（神の／観察対象の）実在それ自体は直接的には認識不可能かもしれないが、その実在から何らかの形で間接的な認識を受け取ることは可能である。この認識を言語化（モデル化・類比化）するという真摯な営みの指摘。ここにおいてマクグラスは科学と神学との接点

(3) もちろん日本においても自然科学と神学との境界線を扱っている神学者はいる。例えば小田垣雅也はその著書『哲学的神学』、創文社、1983. のなかで「宗教と科学」という章を設け（第五章）、マクグラスも本書において論じているトマス・S・クーンのパラダイム論やティヤール・ド・シャルダンの「オメガ点」の思想などを扱っている。また落合仁司は『〈神〉の証明』、講談社、1998. において、数学者カントールの集合論を用い、内在（有限）と超越（無限）という相矛盾する概念が同時に成立する事態を数学的に解明しようと試みている。

を見ている。第七章「科学と宗教におけるモデルと類比」では、自然科学におけるモデルと、キリスト教における類比や隠喩との、このような共通点について論じられている。

たとえば原子核とその周囲をまわる電子のモデルは、理科の教科書でもお馴染みのものである。だが実在する原子を肉眼で観た者はいない。わたしたちが目にするモデルは実在の原子そのものではなく、あくまでそのモデルである。そのようなモデルを用いると実験で観察される現象をうまく説明できる、ということである。しかしモデルが現象を説明できるからといって、そのモデルがそのまま実在するというにはならない。だからといってモデルが表していることは空虚な幻想である、ということでもない。モデルはまぎれもなく実在する原子についての、観察可能な一側面を表してはいるのである。宗教の言語もそれと似ているとマクグラスは言うのである⁽⁴⁾。それは以下のようなことである。「神は父である」というとき、神が（あちこちの家庭で見かけるような）人間の父親であるわけではない。しかし「神はわたしたちの父である」などの（人間の父親との）類比、また神についての「父」や「羊飼い」などの隠喩は、実在する神についての我々の体験に関する、ある一側面をまぎれもなく表現してはいるのである。このような意味において、キリスト教における類比や隠喩の表現は、自然科学におけるモデルの使用との共通点を持つ。もちろんマクグラスは、自然科学におけるモデルと、宗教における類比や隠喩とのあいだには、相違点があることも指摘している。それは以下のような点である。自然科学におけるモデルは、その後の新たな発見によって随時修正されたり、場合によっては廃棄されて新たなモデルに取って代わられたりする。しかし宗教における類比や隠喩は、その信仰において根源的な意味をたたえ続け、類比や隠喩の言葉そのものが廃棄されたり取って代わられたりすることはほとんどない。それらの言葉は常に解釈へと開かれ続けている。その点が異なるというのである（164頁）。

さらに第七章においては、モデルについてのこのような理解を用いて、量子論における相補性原理と神学における弁証法的方法との相似が指摘されている（167頁）。元来「光は波動である」というモデルと「光は粒子である」というモデルとは、互いに矛盾しあうと考えられていた。しかしニールス・ボーアらの研究によって、光や物質はそのどちらでもあるとしか説明のしようがない、という結論に至った。光や物質は、波動のみにも、粒子のみにも還元し得ない。光や物質は、両立し得ないはずの波動と粒子という、その双方の側面を同時に持っている。これが相補性原理の大意であ

(4) 科学的モデルと聖書における比喩（隠喩）との関係については、ポール・リクール著、久米博・佐々木啓訳、『聖書解釈学』、ヨルダン社、1995、288-289頁および301頁。が、さらに深い示唆を与えてくれる。そこでは、モデルは、たんに現象を説明するだけでなく、観察者が（その説明によって）さらにふさわしい記述を切り開くための発見的装置として働くことが強調されている。

る。マクグラスはこの相補性原理を、ローダーやニードハルドらの神学を用いて、バルトの弁証法神学に関連付ける。すなわち時間と永遠、イエス・キリストにおける人性と神性の両立に、である⁽⁵⁾。また、この相補性の観点から、本書では初期キリスト教におけるキリスト論（カルケドン信条的キリスト論）の成立が評価されている。福音書に証言されるイエス・キリストの神性と人性を、初期のキリスト教会は神か人かのいずれか一方に還元してしまうことなく、神人両性キリスト論として成立させたからである（169 頁）。光は波動であり粒子である。／イエス・キリストは神であり人である⁽⁶⁾。ちなみに科学と宗教とのこのような共通点の指摘は、宗教哲学の世界で言われる「絶対矛盾的自己同一」の論理が自然科学へと開かれている可能性をも、本書では直接言及はしないものの、あらためて示唆しているように思われる。

神学と自然科学とのこのような接近について、マクグラスは結論に急がないという点も入門書として評価できる。“これは神の存在の「証明」ではないが、創造者なる神の存在とは大層よく一致した、一連の考察のさらなる要素ではある。”（180 頁）、“その言葉の厳格な意味においては何をとも証明してはいないが、明らかにそれは世界の有神論的解釈と一致しているのである。”（184 頁）。これらの表現から、科学と宗教との境界線における自然神学のあり方についての、マクグラスの慎重な理解がうかがえる。自然神学は神の存在を証明するために自然科学を援用するのではない。自然神学は、科学的発見と信仰における世界理解とは調和し得るという、その可能性について探求するのである。そのようにマクグラスは自然神学の可能性を考え、読者をその可能性の実現へとといざなっているように思われる。

しかし第七章には疑問を感じる箇所もある。フェミニズム神学について短く言及されているのだが、その簡略さとは裏腹に読者への大きな影響力をもって、フェミニズム神学全体が過小評価されている印象を受ける。神に性をみることをマクグラスは、まず“誤解”（159 頁）と前提して議論を始めている。“神を人間の父にモデル化することは、神が男性であるということではないし、男性が女性にまさるということでもない。この言葉の男性性は人間の言葉と思考方法への適用であって、字義的な神の表示ではない。”（160 頁）。しかしマクグラスの言う神の無性性を承知の上で、歴史上男性優位に行われてきた信仰の営みへの問題提起として、あえて神の女性性を挑戦的

(5) ただし「自然科学において相補性原理が成立するように、神についての言明にも比喩的な意味で相補性原理が生じる」という可能性の指摘以上のものではない。相補性原理が神人両性論を、まして神の存在を証明するわけでは決してない。A. ソーカルと J. ブリクモンによる前掲書を参照。また本書評で後述するように、マクグラス自身もそのことはわきまえている。

(6) このような弁証の仕方は真新しいものではないようである。ヨゼフ・ラッチンガー著、小林珍雄訳、『キリスト教入門』、エンデルレ書店、1973、99-101 頁。参照。物理学における相補性原理や純粋客観の否定（観察者と観察対象との相関性）から類推して三位一体論を考察する議論が、1970 年以前にすでに存在していたことが、そこには大まかながら伝えられている。

に論じる可能性もあるだろう。そもそも神に性をイメージすることを“誤解”と断定できるのかどうかは、より幅広い文脈からの検証が必要である。第七章は本書中もっとも印象に残る仕方科学と宗教との共通性を論じているだけに、この箇所におけるフェミニズム神学の過小評価には危うさを感じる。読者は入門書として本書を読みながら、その明快な論理展開のなかで「なるほど、フェミニズム神学はこのようにして論駁できる」と早合点してしまうかもしれない。

第七章のことばかりに集中してしまったが、最後に全体的な書評に戻って考えるならば、宗教と科学との倫理的な葛藤の側面について、本書においてもう一步踏み込んでもらいたかった。たとえば科学「技術」と宗教「倫理」とのあいだに生じている埋めがたい溝について、自然科学との橋渡しをする自然神学はどのような具体的可能性を持っているのか。こうした点について、マクグラスのさらなる見解を聞きたかった。けれども彼が入門書として本書を書いている以上、そこから先は読者が考えるべき領域なのだろう。いずれにせよ、本書において扱われているのは自然科学と広い意味でのキリスト教／宗教なのだから、具体的な科学技術と宗教倫理との問題は、別の場所で論じられなければならないのだろう。

キリスト教の礼拝説教において、社会や人間に科学がもたらした歪みが批判され、生命や環境は神から与えられたものだ論じられることがよくある。しかしはじめに述べたように、自然科学の専門家ではないキリスト者、たとえば「文系」の牧師は科学に対して無知である場合が多い。筆者自身、自然科学からの問いかけに対して応答しようとしても、宗教の言葉のみが空回りしてしまい、科学の場における具体的現実に対して、まったく無力であることを痛感させられている。神の存在の問題、神に創られたものとしての生命の尊厳の問題など、キリスト教は科学からつねに挑戦を受けている。科学からの問いかけに対して、キリスト者が現実離れした独り言に陥らないようにするには、どうすればよいのか。むしろ科学的な認識論との活発な交流をとおして、神学がさらにゆたかになるためには、どのような態度が必要か。このような科学と宗教との境界線からの、緊張感と新鮮さに満ちた議論を引き続き学んでみたい。マクグラスの今後の発信に期待する。